第 3 章　宮津市の歴史文化の特徴と関連文化財群

第 1 節　地域的な特徴

1　日ヶ谷地区　－丹後半島に展開する山の生活文化－

①位置と地形　宮津市の北西部に位置し、北側を伊根町、西側を京丹後市と接します。犀川上流域の山間部にあり、尾根上の地滑り地形を中心として立、大西、牧、藪田、落山、厚垣集落が点在します（図 78）。

②沿革　古代・中世には日置郷に属すと考えられます。『京極拝領郷村帳』に火ヶ谷村、『延宝三年郷村帳』には日ヶ谷村とあり、市町村制によって明治 22 年には日ヶ谷村となりました。岩ヶ鼻（養老地区）と筒川村、本庄村（伊根町）を結ぶ交通の要衝に位置することから、明治 25 年（1892）には与謝郡の村で 4 番目の人口を誇りましたが、三八豪雪で成谷が離村したほか、藪田でも 2 度の火災によって人口が減少しました。

③歴史文化　大西の天長寺は、天平年間の創建と伝えられる威光寺の後身寺院です（図 79）。平安時代後期に書写された「大般若経」などを所蔵し、日ヶ谷が古い歴史をもつ地域であることを物語ります。また、天長寺の裏山には中世の日ヶ谷城跡があり、一色家臣の松田氏が城主と伝えられます。大西には天文 3 年（1534）の創建とされ江戸時代に現在地に移転した円教寺が、厚垣には安永 8 年（1779）に再興された日輪寺があります。

江戸時代に宮津藩直轄の山林（御林、御立藪）が設置されたほか、牛飼い（立）、養蚕（大西）、炭焼き（成谷）といった山村の生業がみられ、丘陵には階段状の畑が展開しました。特に、日ヶ谷の土壌はゴボウ栽培に適しており、大正 14 年（1925）から 15 年に皇室へ献上されたほか、昭和初期から戦前には「日ヶ谷ゴボウ」として京都に出荷されました。

日ヶ谷は日吉神社（岩ヶ鼻）を氏神とし、かつては日吉神社例祭で、大西、立が太刀振と踊りを、落山が神楽を奉納しました。また、下垣神社に奉納される落山神楽は、文政元年（1818）、桑名の師匠によって伝授された伊勢神楽で、落山から加悦町滝や伊根町井室へと伝えられました。昭和 37 年を最後に途絶えていましたが、昭和 49 年に保存会が組織され 12 年ぶりに村祭りで奉納。文化祭や郷土芸能祭、宮津祭でも披露されました。現在は休止となっていますが、宮津市の無形民俗文化財に指定されています。

図 78　藪田集落

図 79　天長寺

２　養老地区　－宮津湾の入口に展開する漁業基地－

①位置と地形　宮津市の北西部に位置します。北側を伊根町と接し、東側は若狭湾に面しています。波見岬と対岸の黒崎（栗田地区）を見通した線が、若狭湾と宮津湾を分ける境界とされており、養老は宮津湾の入口をおさえる場所に当たります。海岸部には砂浜が発達し大島、岩ヶ鼻、長江集落が立地します（図 80）。また、日出（伊根町）と厚垣（日ヶ谷地区）の中間には田原集落が、犀川の中流域には外垣集落が、波見川流域の谷に沿って奥波見、中波見、里波見集落が立地します。

②沿革　古代・中世には日置郷に属すと考えられ、『丹後国惣田数帳』には波見保の地名がみられます。『延宝三年郷村帳』には田原村、大島村、外垣村、岩ヶ鼻村、長江村、里波見村、中波見村、奥波見村がみられ、市町村制によって明治 22 年に養老村となりました。このうち大島村、奥波見村は、享保 2 年（1717）、宮津藩主・青山幸秀の入部の際に代官所領となりました。

③歴史文化　白山神社は大島の産土神で、懸仏（鎌倉時代）を伝来します。また、天正 10 年（1582）に開山した田原の龍燈寺には、薬師如来坐像（鎌倉時代）がみられ、同集落の薬師堂に安置されていたと伝えられます。伊根町との境界をなす城山には大島城跡があり、南に若狭湾から宮津湾を、東に青島や亀島（伊根町）を眺望することができます。一色家臣の千賀氏が城主と伝えられます。また、田原城跡、岩ヶ鼻城跡、高尾山城跡と中世城館が点在し、一色氏に関連するものと考えられます。

近世の養老は、半漁半農の集落として栄えました。特に、大島では鰤刺網など漁業の先進地であった伊根浦の影響を受けて、近世初頭から漁業が盛んになりました。大正時代には搾粕、搾油装置による魚肥、魚油の加工が行われ、海岸部には煉瓦造りの煙突が連なる景観がみられました。

日吉神社（岩ヶ鼻）は、もとは日ヶ谷地区に所在し、天文 18 年（1549）、現在地に移されました（図 81）。伊根庄一ノ宮として、日ヶ谷、大島、外垣、岩ヶ鼻のほか、日出、高梨、平田、大原（伊根町）を加えた 8 ヶ村の信仰を集めましたが、幕末期には日ヶ谷、大島、外垣、岩ヶ鼻のみが氏子となりました。10 月 15 日に例祭が行われ、対岸の栗田地区からも芸能が奉納されましたが現在は休止となっています。同日には白山神社（大島）でも例祭が行われ、現在も神楽、太刀振り、踊り子芸能が奉納されています。

また、6 月末に行われる大島の「オシマ参り」は、漁村の祭礼として重要です。農業祭礼のサナブリと結びつき、「オシマ参り」の宵宮に「さなぼり」行事が行われる点が特徴的です。提灯で飾った巡礼船が、子供達を乗せて夜の海へ漕ぎ出す光景は幻想的です。

図 80　大島集落

図 81　日吉神社（岩ヶ鼻）

３　世屋地区　－藤織りを伝承する棚田と茅葺き屋根の里－

①位置と地形　宮津市の北西部に位置します。世屋川上流域の地すべり地形を利用して駒倉、木子、上世屋集落が、世屋川流域に松尾、下世屋が、畑川流域に畑村集落が立地します。山間部には美しいブナ林が広がり、大フケ湿原には貴重な湿原性植物の群集や稀少植物が分布します。また、上世屋集落では、NPO 里山ネットワーク世屋などにより棚田が維持され、茅葺き屋根の民家とともに美しい里山景観をみせています（図 82）。

②沿革　古代には日置郷に属すと考えられます。建久 3 年（1192）の願文に「野間世野者」、貞永元年（1232）頃の領地争いの申状には「国領野間世屋村」を「惣名永久保」とするとあり、野間（京丹後市）とのつながりがうかがえます。『京極拝領郷村帳』に上世野村、畑村が、『延宝九年郷村帳』には駒倉村、木子村、上世屋村、下世屋村、東野村、松尾村、畑村の地名がみられ、市町村制によって明治 22 年に世屋村となりました。

③歴史文化　上世屋の慈眼寺は、『慈眼寺縁起』により成相寺の奥の院と伝えられ、本堂の北側には、本尊の聖観音像を祀ったとされる観音堂や銚子の滝があります。また、畑集落の阿弥陀堂には、応永 27 年（1420）の銘をもつ地蔵一尊板碑があり、中世に遡る寺院の存在が想定されます。中世城館としては上世屋城跡、下世屋城跡、松尾城跡、畑城跡が点在し、上世屋城跡は上野甚太夫、片岡宗十郎、下世屋城跡は前野半助を城主としたと伝承されます。

江戸時代には、世屋地区から運ばれた炭や薪が日置浜村に集積され、船で宮津城下町へと運ばれました。また、近世以来、山林資源を生かした生業が営まれ、上世屋では藤織りが、畑では紙漉が冬場の副業として貴重な現金収入となりました。現在、丹後藤織り保存会を中心に藤織りの技術が伝承され（図 83）、「丹後の藤布紡織習俗」が国選択の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財となっています。一方、畑の紙漉きは、半紙、障子紙や火薬包みなどに使われましたが、昭和 53 年に製造が停止され、現在は京都府立丹後郷土資料館の紙漉き同好会によって伝承されています。

４　日置地区　－豊富な仏教美術と中世御家人・日置氏の里－

①位置と地形　宮津市の北西部に位置します。世屋川、畑川の下流域に当たり、東は宮津湾に面します。海に突き出た弥助山により、沿岸流の浸食が遮られ扇状地性の沖積低地が発達します。また、海岸部には砂州がみられ、後背湿地には条里制の水田が広がります。丘陵の先端部に日置上集落が、海岸部に日置浜集落が立地します。

図 82　上世屋集落

図 83　藤織り伝承館

②沿革　古代・中世には日置郷に属すと考えられます。『京極拝領郷村帳』に日置郷、『延宝三年郷村帳』には日置上村、日置濱村とあり、市町村制によって明治 22 年に日置村となりました。江戸時代には、日置上村と日置濱村の境界に生野代官所の出張陣屋が置かれ、一時は幕府領となりましたが、享保 4 年（1719）、湊宮村（京丹後市久美浜町）へ代官所が移りました。

③歴史文化　日置高畦遺跡から弥生時代前期の土器が、日置塚谷遺跡から銅剣形石剣が出土し、早くから沖積低地の開発が行われたと考えられます。

古代から中世には豊富な仏教美術がみられ、日置地区の文化の高さを物語ります。まず、金剛心院（日置上）は平安時代の創建と伝えられ、もとは宝光寿院と呼ばれました（図 84）。鎌倉時代に律宗の僧侶・忍性によって中興され、元亨 3 年（1323）の制札には「国家御祈祷の霊場」とあります。平安時代の如来形立像は市域最古の仏像で、国分寺を中心とした薬師信仰の広がりを示します。また、本尊として鎌倉時代の愛染明王像が祀られています。次に、禅海寺（日置上）は、貞観年間に創建されたと伝えられ、もとは寿福寺と呼ばれました（図 85）。平安時代の阿弥陀三尊像や千手観音像があり、迎講など天台浄土教の広がりを示します。さらに、天正 12 年（1584）には日乗によって妙円寺（日置浜）が開山され、庭園が京都府指定文化財となっています。

中世の日置地区を考える上で、御家人・日置氏の登場が注目されます。鎌倉時代から南北朝時代に活躍し、特に、南北朝の戦乱では日置末清が足利高氏（尊氏）の軍勢に参加した記録があります。また、金剛心院には足利高氏が発給した禁制が残されており、北朝と日置地区との関連がうかがえます。日置上城跡は「日置殿」が城主であると伝えられ、麓にある禅海寺は日置氏の菩提寺とされています。

江戸時代には、農業を生業とした日置上村に対して、日置浜村は畑川、世屋川を通じて集積した世屋地区の炭や薪を、宮津城下町へと運ぶ物流拠点となりました。近世後期の日置浜村では、「木中間」と呼ばれる組合が結成され、廻船による交易に携わるとともに、違法な木材取引を取り締まりました。また、近年では休耕田を利用して桧扇が栽培され、京都祇園祭の山鉾に欠かせないものとして、6 月下旬から 7 月中旬に出荷されています。

日置上の氏神・若田神社では、春の例祭で神楽、太刀振りが奉納され、かつては花踊りも行われました。前夜には「裸祭り」の行事があり、参加者が総出で下着一枚となり浜で潮垢離をした後、般若心経を唱えます。また、日置上では釈迦入滅日である 3 月 14 日に、小学生が早朝に檀家を訪れて御供米を集める「涅槃の雀」という行事がみられます。古くは金剛心院の行事で、現在は禅海寺の檀家の子供達も参加しています。

図 84　金剛心院

図 85　禅海寺

5　府中地区　－古代国府と丹後府中の繁栄－

①位置と地形　天橋立北側の阿蘇海北岸に位置します。北側には丹後半島の脊梁をなす山地がそびえ、南側は阿蘇海や宮津湾に面しています。山地から南流する寺川、小松川、真名井川により複合扇状地が形成され、難波野、大垣、中野、小松、国分集落が立地します。また、宮津湾に面して砂州が、真名井川の下流域には自然堤防がみられ、後背湿地には条里制の水田が広がります。砂州には江尻集落が、自然堤防には天橋集落が立地します。さらに阿蘇海に面して溝尻集落が展開し、約 40 軒の舟屋が残されています。

②沿革　古代・中世には拝師郷に属すと考えられます。『京極拝領郷村帳』に府中郷、『延宝三年郷村帳』には国分村、小松村、中野村、大垣村、難波野村、溝尻村、江尻村、成相寺とあり、市町村制によって明治 22 年に府中村となりました。

③歴史文化　中野遺跡や国分遺跡で縄文時代早期の土器が出土し、天橋立が形成された弥生時代中頃に遺跡が増加します。また、難波野遺跡では古墳時代中期の祭祀遺構が検出され、天橋立を意識して 300 個以上の土師器が「コ」字状に並べられていました。

古代の府中地区は丹後国府の有力な候補地とされています。丹後国分寺跡（図 86）や一宮の籠神社、「印鑰」が転訛した飯役社など国府に関連する社寺が点在します。また、丹後国分寺跡の背後には成相寺が創建され、僧侶の山林修行の場であったと考えられます。安国寺遺跡、中野遺跡、難波野遺跡からは、銅銭や墨書土器、硯など国府に関連する資料が出土しており、今後の発掘調査によって丹後国府の解明が期待されます。

中世にも守護所が置かれたと考えられ、丹後国の政治・経済の中心地として発展しました。明徳 3 年（1392）、一色満範が丹後国守護に任命され、特に、一色義直が在国すると丹後府中の都市整備が進められました。その姿は雪舟「天橋立図」に見事に描かれており、智恩寺、国分寺、成相寺、籠神社をはじめ多くの社寺が林立する景観は、天橋立と一体となって中世霊場の姿を良く示しています。しかし、永正 3 年（1506）、若狭武田氏が丹後国に侵攻し、雪舟が描いた丹後府中の町並みは戦火にあいました。

天正 8 年（1580）、細川藤孝・忠興が丹後国に入部し宮津城を築城すると、政治の中心地は宮津地区へと移りました。ただし、これ以降も籠神社や成相寺への参詣道に沿って門前町が展開し、都市的機能を維持したと考えられます。特に、近代には傘松公園の設置を皮切りに（図 87）、成相山スキー場や傘松ケーブル、一の宮桟橋が整備され、近代観光地へと生まれ変わりました。現在も文珠地区とともに、天橋立観光の拠点となっています。

籠神社の例祭は 4 月に行われ、「葵祭」の名で知られています。神幸に前後して奉納される太刀振りや神楽が見どころで、京都府の無形民俗文化財に指定されています。

図 86　丹後国分寺跡の礎石

図 87　傘松公園と股のぞき

６　吉津地区　ー野田川河口の拠点・須津、智恩寺の門前町・文珠ー

①位置と地形　天橋立の南岸に位置し、須津、文珠の 2 つの地域で構成されます。須津は野田川の河口付近にあり、西側を与謝野町と接します。三方を山地に囲まれた扇状地に集落が立地します。文珠は天橋立の砂州と水道（切戸）を挟んで相対します。丘陵の端部に集落が形成され、幕末から明治時代の新田開発によって平地が広げられました。

②沿革　古代には宮津郷、中世には宮津庄に属すと考えられ、『京極拝領郷村帳』や『延宝九年郷村帳』には須津村とあります。また、文珠は『慶長郷村帳』に「下宮津之内」として文珠門前の地名があり波路村に属しました。寛文年間に惣村となり、明治 8 年に文珠村として独立しました。その後、市町村制によって明治 22 年には吉津村となりました。

③須津の歴史文化　古墳時代前期から野田川の河口を望むように古墳が展開します。特に、後期古墳が集中し、霧ヶ鼻古墳群、倉梯山 1 号墳では横穴式石室が確認されています。古代の様相は不明ですが、中世には倉梯山城跡、須津城跡が展開し、江木豊後守が城主と伝えられます。倉梯山城跡では畝状竪堀がみられ、野田川の河口をおさえる軍事的な拠点として注目されます。

江戸時代には江西寺が現在地に移転しました（図 88）。南北朝時代の「十六羅漢図」や与謝蕪村「墨画風竹図」を所蔵し、庭園は京都府指定文化財となっています。近世の須津は北国街道の開通により物資の集積地となり、近代には商工業地帯として発展しました。須津彦神社では 4 月に例祭が行われ、太刀振り、神楽、笹囃子が奉納されています。

④文珠の歴史文化　文珠の歴史は智恩寺とともにありました。智恩寺は延喜 4 年（904）に醍醐天皇の勅願寺として山号を賜ったと伝えられ、本堂内陣の四天柱からは鎌倉時代後期の墨書が発見されています。中世に禅宗寺院として再興され、日本三文殊の一つとして信仰を集めています。多くの文化財を所蔵し、明応 10 年（1501）に落成した多宝塔は、雪舟「天橋立図」の製作年代を考える上で注目されています。

江戸時代に宮津城下町が築かれると、文珠は天橋立への拠点として重要性を増し、智恩寺の南側に門前町が成立しました。18 世紀には四軒茶屋が出現し、「智恵の餅」は現在も名物となっています（図 89）。

文化年間の旅日記から宿屋の整備は遅れたようですが、明治時代に四軒茶屋の経営者が旅館の建設に乗り出し、明治末年の文珠海岸は、木造 3 階建ての旅館が建ち並ぶ景観へと変貌しました。また、海水浴客の増加にともなって大正時代には潮湯が開業するなど、府中地区とともに近代観光地として発展しました。特に、大正 14 年（1925）には、鉄道の延伸により天橋立駅が設置され、現在も天橋立観光の玄関口となっています。

図 88　江西寺（須津）

図 89　智恩寺の門前と四軒茶屋（文珠）

7　天橋立　－日本を代表する景勝地－

①位置と地形　宮津市の南西部に位置する南北に伸びる砂州です。北砂州（大天橋）、南砂州（小天橋、第 2 砂州）と陸地化した第 2 小天橋からなり、砂州上には約 6,700 本の松林がみられます（図 90）。外海の宮津湾、内海の阿蘇海に囲まれ、江戸時代中期までは、北砂州にある天橋立神社の付近が天橋立の先端でした。天橋立と文珠の間には幅約 100m の水道（切戸）がみられ、阿蘇海は潟湖を呈しました。

②天橋立の伝承と霊場　奈良時代の『丹後国風土記』逸文には「天椅立」の伝承がみられ、伊射奈芸命が天に通うために立てた梯子が、倒れ伏して天橋立が誕生したとされています。また、室町時代の『九世戸縁起』には、①伊弉諾尊、伊弉冉尊が、龍神を平定するために中国の五台山から文殊菩薩を招いたこと、②文殊菩薩が海に如意を浮かべ、龍神たちが土を築き、天人が一夜にして松を植え橋立となったことが記され、神仏が習合した中世神話として注目されます。

天橋立の神秘的な造形は、神仏の力によるものとされ、周辺の智恩寺、成相寺、籠神社などと一体になって霊場を形成しました。『成相寺参詣曼荼羅』には、天橋立を行き来する人物が描かれ、社寺参詣の参道でもあったと考えられます。

③名所と日本三景　平安時代には、貴族の邸宅に天橋立をモデルとした庭園が造られ、歌会の舞台となりました。天橋立は和歌の歌枕となり、都の貴族が憧れる「名所」としてその名を知られていったのです。江戸時代には松島（宮城県）、宮島（広島県）とともに日本三景の一つとされ、現在も日本を代表する景勝地となっています。

④天橋立内の保全　江戸時代後期、砂州が急速に伸張し阿蘇海の閉鎖性が高まったことから、イワシの不漁が問題とりました。阿蘇海の漁民から「橋立裁断」の願い出が提出されましたが、天橋立を管理する智恩寺の住持によって退けられ、江戸時代における天橋立の保存運動として評価されています。

明治 4 年（1871）、天橋立は智恩寺の管理を離れ、官有地となりました。明治 38 年には天の橋立公園が設置され、橋梁・大天橋、小天橋（回旋橋）などが整備されました（図 91）。また、大正 11 年（1922）には史蹟名勝天然記念物法保存法に基づいて名勝に指定され、天橋立保全の原点となりました（昭和 27 年には特別名勝）。昭和 40 年には「天橋立を守る会」が設立され、市民の手によって清掃や環境保全活動が続けられてきました。近年、天橋立の浸食が顕著になったことから、「サンドバイパス工法」により砂州が維持されています。また、土壌の富栄養化が松林の生育に影響を及ぼすことから、広葉樹林や松の計画的な伐採が実施され、適切な植生の管理が行われています。

図 90　白砂青松の景観

図 91　橋梁・小天橋（回旋橋）

８　宮津地区　ー近世城下町と近代化の歩みー

①位置と地形　宮津市南部に位置し、宮津湾を隔てて天橋立を望みます。大手川の下流域に当たり、南側は三方を大江山山地に囲まれています。宮津湾に面した沖積低地に旧宮津町域が、丘陵の端部には旧城東村の集落が立地します。

②沿革　古代には宮津郷、中世には宮津庄に属すと考えられます。『京極拝領郷村帳』に下宮津、『延宝九年郷村帳』には城下町をのぞいて猟師町、鍛冶町、有田村、田中村、惣村、皆原村、山中村、椎（獅子）崎村、波路村、宮村がみられ、市町村制によって明治 22 年に旧城下町は宮津町に、周辺の町村は城東村となりました。

③歴史文化　宮村遺跡で弥生時代中期の土器が出土しています。また、古墳時代には波路古墳、惣遺跡、天ヶ谷遺跡がみられますが、いずれも丘陵の端部に立地し低地部の開発は難しかったようです。如願寺川流域にある杉末神社は、古代に遡る式内社で（現在は日吉神社の摂社）、近接する如願寺は、皇慶により平安時代に創建されたと伝えられます。また、正印寺（宮村）や戒岩寺（波路）でも平安時代の仏像が伝えられています。『丹後国御檀家帳』に「宮津いち場」とあり、和貴宮神社について「分の宮　有宮津市場東渚」とされることから、16 世紀後半には低地部にも町場が形成されたと考えられます。

天正 8 年（1580）、細川藤孝・忠興が入国すると宮津城が築城され、政治・経済の中心地は、府中地区から宮津地区へと移りました。江戸時代になると、京極高広によって宮津城や城下町が再建されました。大手川右岸に宮津城や武家地、左岸には町人地を配置し、城下町の西南部には寺町が置かれました。その都市構造は海岸部の埋立てをのぞき、幕末期まで大きく変わることはなく、現在の町並みの基盤となっています。天橋立への交通拠点として発展するとともに、与謝蕪村や京都画壇の画家たちなど多くの文人が往来しました。また、港町としても発展し、北前船の寄港地となりました。

明治初期には宮津城の跡地や上級武士の邸宅を利用して、警察署や監獄、裁判所、与謝郡役所などの行政機関が建設され、京都府北部の中心的な都市機能を維持しました。特に、大正 13 年（1924）に丹後鉄道が開通すると、天橋立への観光者も増加し本格的な経済復興を遂げました。現在も近世城下町の町割り、屋敷割りを基盤として、近世・近代の各時代を象徴する商家建築、教会建築、旅館建築、近代建築が残されており（図 92・93）、その町並みを通じて近代化の歩みを感じることができます。

日吉神社は江戸時代に藩主の崇敬を集め、現在も藩祭・宮津祭が継承されています。また、地蔵盆、盆踊り「宮津おどり」や灯籠流しなど、伝統的な年中行事や民俗芸能が受け継がれ、地域社会の結びつきを支えています。

図 92　尾藤家住宅

図 93　聖アンデレ教会の教会堂

９　上宮津地区　－宮津と京都を結ぶ交通の大動脈－

①位置と地形　宮津市の南部に位置し、南側を福知山市と接します。大手川の上流域に当たり、丘陵の端部に小田、喜多、今福集落が立地します。

②沿革　古代には宮津郷、中世には宮津庄に属すと考えられます。『京極拝領郷村帳』に上宮津庄、『延宝九年郷村帳』には上宮津小田村、上宮津喜多村、上宮津今福村とあり、市町村制によって明治 22 年に上宮津村となりました。

③歴史文化　桑原口遺跡では弥生時代の竪穴住居が検出され、古くから宮津谷の開発が進められたと考えられます。古代の遺跡として荒木野遺跡、杉本遺跡があり、銅銭や祭祀用の斎串などが出土しています。平安時代には、大江山の南斜面にある普甲寺で迎講が行われ、丹後への仏教文化の伝来を考える上で注目されます。普甲寺の周辺は、中世にもたびたび戦場となっており、交通の要衝であったと考えられます。

喜多に所在する盛林寺は、江戸時代に現在地に移るまで、大久保山（宮津地区）の麓にあり、大久保山城跡の城主・小倉播磨守の菩提寺であったと伝えられます。盛林寺の正面にある上宮津城跡（城山）も、小倉播磨守が城主だったとされており、大久保山城跡との関連は興味深い問題です。盛林寺には、夭折した細川藤孝の男児を描いた「即安梅心童子像」や明智光秀の首塚とされる宝篋印塔があり、細川氏との関係も深い寺院です（図 94）。

江戸時代に宮津城下町が築かれると、普甲峠を越えるルートが整備され、宮津藩の参勤交代や天橋立へ向かう旅行者で賑わいました。従来の旧道（元普甲道）に対して今普甲道と呼ばれています。道中には旅籠や茶屋が営まれ、現在も石畳の道路や関所跡が残されています（図 95）。戦後にも普甲峠を越える形で、鉄道「宮福線」や京都縦貫自動車道が整備され、現在も上宮津地区は、宮津と京都を結ぶ交通の大動脈となっています。

小田の愛宕神社は、上宮津地区の惣社で、毎年 4 月に上宮津祭が行われます。6 組の芸能集団が参集し、神楽、太刀振り、太奴が奉納されます。また、今福では蛇綱が行われています。1 月に藁を持ち寄って大蛇をつくり、法螺貝を先頭に家々を回った後、村の入口にある荒木神社のイチョウに掛けて終了します。「道切り」の一種と考えられ、災難や厄病が村に入らないことを祈るものです。

１０　栗田地区　－栗田半島の津々浦々に展開する漁村－

①位置と地形　宮津市東部に位置し、栗田半島を占める地域です。栗田半島の北側から西側は山地が海岸部に迫り、狭い低地を利用して島陰、田井、矢原、獅子集落が立地しま

図 94　盛林寺

図 95　普甲峠の石畳

す。栗田半島の東側では、栗田湾を囲むように砂浜がみられ、大雲川の下流部には沖積低地が発達します。砂浜上に小田宿野、中津、上司、小寺、中村、脇集落が立地し、後背湿地には水田が広がります。また、大雲川の中流域には新宮集落があります。

②沿革　古代は宮津郷、中世は宮津庄に属すと考えられます。室町時代の等持院領家職には「宮津栗田両庄」と、『丹後国惣田数帳』には宮津庄の内に「栗田村　御料所」とあり、栗田は宮津庄に含まれていたと考えられます。『京極拝領郷村帳』に栗田村、『延宝三年郷村帳』には新宮村、脇村、中村、小寺村、上司村、中津村、矢原村、獅子村、小田宿野村、島陰村、田井村とあり、市町村制によって明治 22 年に栗田村となりました。

③歴史文化　城ヶ谷遺跡から縄文時代の石棒が採集されています。また、後期古墳が多くみられ、小田古墳では横穴式石室から多量の鉄製武器や勾玉、馬具が出土しました。多由神社（田井）、久理陀神社（小田宿野）は古代に遡る式内社で、古くから開発が進められた地域とみることができます。成願寺（小田宿野）には平安時代の薬師如来坐像があり、麻呂子親王が造立した七仏薬師とされています。

中世には栗田湾を望むように宿野山城跡、小田城跡（小田宿野）、高妻山城跡（上司）が築かれました。『丹後国御檀家帳』は、川嶋左衛門尉殿を「くんたしやうし（栗田上司）町」、堀口新右衛門尉殿を「くんたの（栗田）小田」の城主としており、前者が高妻山城跡、後者が小田城跡に当たると考えられます。高妻山城跡の麓にある龍源寺は、河嶋備前守宣久の開基とされ、室町時代に描かれた「河島備前守像」を伝えています。

江戸時代の栗田地区は、小田宿野、中津、上司、田井などで、漁業が盛んに行われました。栗田半島は東に無双鼻、西に黒崎という岬があり、周辺の磯や岩礁にはアジ、サバ、イワシなどの回遊魚が集まりました。こうした漁礁には、引網や越中網（台網）が設置され、特に、大正 13 年（1924）には氷見からイワシの定置網が導入されました。現在も「オオシキ」と呼ばれ、昭和初期には干鰯などの加工品が製造されました。昭和 57 年の護岸工事で風景は一変しましたが、かつて小田宿野には舟屋が建ち並びました（図 96）。

戦時期には舞鶴軍港の航空隊新設に伴って、第 31 海軍航空廠や宿舎、倉庫、製塩所などの施設が建設されました。現在、跡地には京都府立海洋高等学校や京都府立海洋センターが建てられ、水産研究や教育の拠点となっています。

住吉神社は栗田地区の総社で、10 月に例祭が行われます。太刀振り、神楽、太鼓打ちが奉納されるほか、上司と小寺による神輿渡御では、神輿の先棒を取り合う「神輿洗い」が見どころとなっています。また、同社には奉納和船がみられ、海上安全の守護神としても信仰を集めました（図 97）。

図 96　小田宿野の集落

図 97　住吉神社

11　由良地区　－日本海交流を物語る「さんせう太夫」と北前船の里－

①位置と地形　宮津市の東端に位置し、舞鶴市と接します。由良川の下流域に当たり、北側は若狭湾に面しています。由良川河口の左岸には砂州が発達し、後背湿地には水田が広がります。砂州上には脇、宮本、浜野路、港集落が立地します。また、由良川を少し遡った地点には、丘陵の端部に下石浦、上石浦集落が立地します。上石浦では由良川に中州がみられ、川を渡る交通の要衝であったと考えられます。由良川は流域面積 1880 ㎢で、京都府最大の河川です。瀬戸内海に流れる加古川との分水嶺は日本で一番低く、江戸時代には由良川と加古川、由良川と大堰川を通船する計画が持ち上がりました。

②沿革　古代・中世には加佐郡凡海郷に属すと考えられます。江戸時代には田辺藩領となり、藩主・牧野親茂の時に由良村と石浦村に分割されました。市町村制によって明治 22 年に由良村となり、昭和 31 年に宮津市と合併しました。

③歴史文化　江戸時代に銅鐸が出土したとする記録があり、古くから開発が進められたと考えられます。三庄太夫屋敷跡と伝えられる上石浦の石室からは、明治 42 年に水晶の勾玉が出土し、東京国立博物館に所蔵されています。また、奈具神社（脇）は、古代に遡る式内社です（図 98）。

中世から近世初頭には説経節「さんせう太夫」の舞台となりました。母と姉の安寿、づし王が売り分けられる越後直井の浦（直江津）や、父のいわきの判官正氏が拠点とした津軽十三湊は、中世の重要な港湾都市で日本海交流を反映する内容となっています。如意寺の快慶作・地蔵菩薩像は「身代わり地蔵」と呼ばれ、焼け火箸を当てられた安寿とづし王の火傷の身代りになったという伝承をもちます。

江戸時代には綾部藩、福知山藩の物資を輸送する水運が盛んになり、由良地区は丹波と日本海を結ぶ中継地として発展しました。特に、江戸時代後期から明治時代には、北前船の船持ちや船頭を輩出し、船頭・加藤長助の日記により、大坂と北海道を往復する回船の航路が復元されています。金毘羅神社、玉司稲荷神社、照国稲荷神社には船絵馬が奉納され、海上安全への想いを偲ぶことができます。また、砂浜では揚浜式の製塩が行われ、田辺藩の記録には、「塩浜長サ六百十三間、釜屋数百九十七軒」とあります。

大正 13 年には、由良鉄橋が架橋され丹後鉄道が開通しました（図 99）。丹後由良駅が開業し、海水浴客で賑わいました。また、曾禰好忠の和歌をはじめ、森鴎外『山椒太夫』や三島由紀夫『金閣寺』の舞台としても知られ、多くの文学碑が建てられています。

奈具神社（脇）と由良神社（宮本）では、10 月に例祭が行われます。由良神社では神輿渡御や神楽踊り、扇踊り、船頭踊りという奉納太鼓に加え、芸屋台が巡行します。

図 98　式内社の奈具神社

図 99　由良湊と鉄橋

第２節　宮津市の歴史文化の特徴

１　宮津市の多彩な歴史文化

宮津市を象徴する特別名勝・天橋立は、平安時代より和歌の歌枕である「名所」として貴族の憧れの地となり、江戸時代には日本三景の一つとなりました。その美しい姿は多くの人々を魅了し、現在も日本を代表する景勝地として、年間 300 万人を集める観光地となっています。天橋立の存在は、宮津市の歴史や文化に大きな影響を与えてきましたが、宮津市の歴史文化の特徴は、決して天橋立だけで語れるものではなく、これを囲むように展開してきた多彩な都市や集落が、海・山・里が織りなす豊かな自然と一体となって、紡いできたものと評価できます（図 100）。

天橋立周辺の府中地区、吉津地区（文珠）、宮津地区には、古代国府、中世守護所、近世城下町や門前町が展開し、丹後の政治・経済・宗教の中心として発展しました。また、その周囲には豊かな自然に適応した農村や漁村、山村が展開し、舟屋が残る溝尻や、笹葺き屋根の民家と棚田が広がる上世屋では、海や山を舞台とした伝統的な生活文化が受け継がれています。

個性豊かな地域社会は、陸路・海路で結ばれ、丹後府中や宮津城下町といった政治都市を結束点として、一つの政治圏や経済圏、交流圏、文化圏を形成してきました。各地区で継承される祭礼芸能や年中行事には、共通した要素が多くみられ、地域間の交流の中で伝播・伝承したものと考えられます。こうした地域のまとまりは、昭和 29 年の市制誕生や昭和 31 年の由良村編入によって、現在の宮津市の市域をなすと同時に、現在も各地区で自治会、公民館、地域会議などの活発な活動や、祭礼芸能や年中行事の着実な継承が行われています。こうした地域のコミュニティは、文化財の保存・活用においても重要な基盤とな

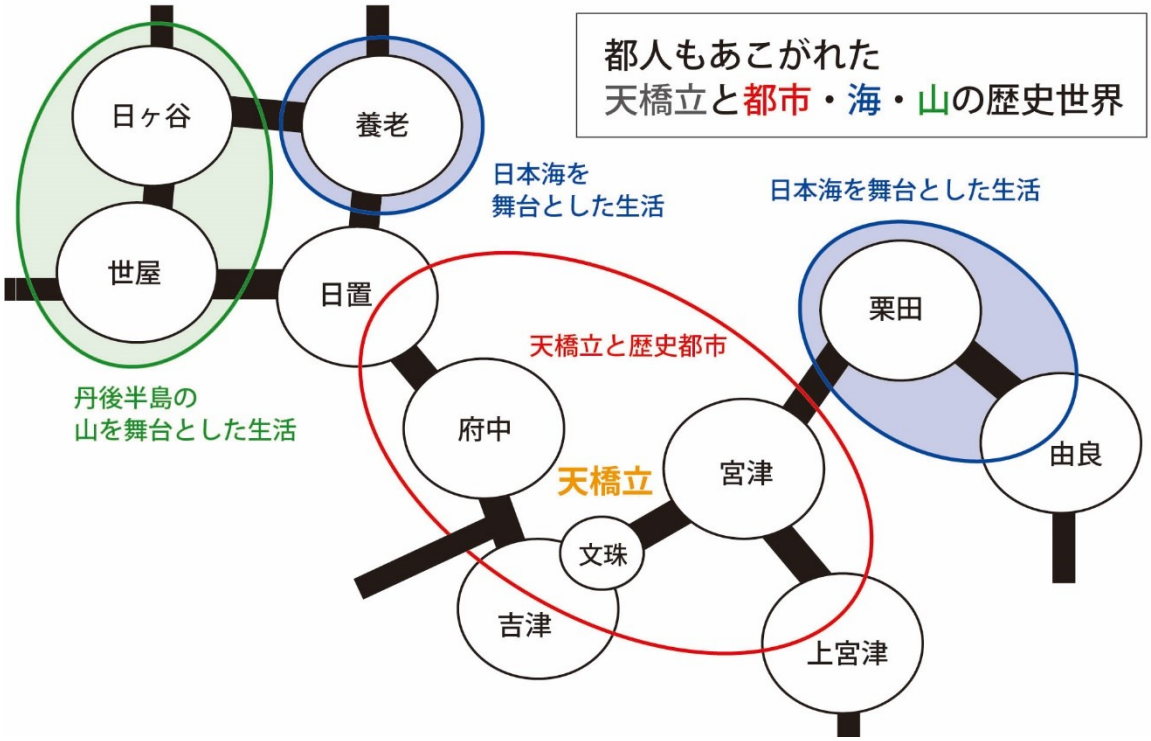

図 100　歴史文化にみる宮津市の地域構造

るものです。

本地域計画では、こうした歴史文化の特徴を「**都人もあこがれた、天橋立と都市・海・山の歴史世界（仮）**」というコンセプトで表現します（図 100）。以下では 5 つのテーマに沿って、その特徴をみていきます。

２　天橋立をとりまく歴史都市　－丹後府中、文珠門前町、宮津城下町－

天橋立の北側の府中地区は、古代国府や中世の守護所が置かれたと考えられ、特に、中世の丹後府中の姿は雪舟「天橋立図」に見事に描かれています。多くの社寺が林立する景観は、天橋立と一体となって神仏習合の霊場を形成したとされています。戦国時代には天橋立の東南の宮津地区に、細川藤孝・忠興により城下町が築かれ、丹後における政治・経済の中心地は、府中地区から宮津地区へと移動しました。近代以降も宮津地区には公共施設や金融機関が集中し、京都府北部の中心都市として発展しました。

一方、天橋立の南側の吉津地区（文珠）は、江戸時代に宮津城下町と天橋立、府中地区を結ぶ参詣の拠点となり、智恩寺を中心として門前町を形成しました。また、府中地区の大垣でも成相寺や籠神社に向かう沿道に門前町が形成され、文珠地区とともに天橋立観光の中心地となりました。

天橋立の周辺には、古代国府や中世守護所、近世城下町と各時代を代表する政治都市が継続的につくられるとともに、府中地区や吉津地区（文珠）では、近世以降、門前町が形

丹後国分寺跡からみた天橋立（府中地区）

智恩寺の門前町（文珠地区）

河原の町並みと旧三上家住宅（宮津地区）

成され、多彩な歴史都市が展開しました。こうした都市の存在は、日本を代表する景勝地・天橋立への拠点として、多くの参詣者や文人墨客の往来を支えるとともに、現在も町並みや景観の基盤となっています。

３　天橋立への往来と日本海交流

天橋立は平安時代から和歌の歌枕である「名所」になるとともに、中世には天橋立と周辺の社寺が一体となって霊場を形成し、多くの参詣者を集めました。また、近代には旅の多様化にあわせて公園や海水浴場、展望所が整備され、府中地区、吉津地区（文珠）、宮津地区には木造三階建ての旅館が建てられました。その変遷は、日本の旅の歴史を良く示すもので、「往来に関わる景観地」として重要文化的景観「宮津天橋立の文化的景観」に選定されています。

天橋立への道は、古代から中世には山陰道丹後支路である与謝峠越が利用され、宮津地区に城下町が築かれた近世には、普甲峠越のルートが整備されました。また、古くから由良川河口を経由して宮津地区に至る七曲八峠越も利用され、近代には、このルートに沿って京都・宮津間車道や鉄道が整備されました。丹後国司・藤原保昌の妻である和泉式部や足利義満、雪舟、与謝蕪村、与謝野鉄幹・晶子などの文化人が宮津や天橋立を訪れ、多くの芸術作品を残しました。また、僧侶や庶民の足跡は、旅日記などによって知ることができ、日本の旅の姿を生き生きと伝えてくれます。

さらに、宮津市は日本海に面することから、海を介した往来が盛んであったと考えられます。由良地区を舞台とした説教節「さんせう太夫」は、中世の日本海交流を反映するもので、江戸時代から明治時代には北前船が盛行しました。宮津地区や由良地区からは北前船の船持ちや船頭が輩出され、宮津地区は寄港地としても賑わったと考えられます。明治21年（1888）には鶴賀－宮津間航路が開かれ、近代宮津の発展の礎となりました。

４　若狭湾を舞台とした生活

日本海に面する宮津市は、若狭湾の西端に位置します。曲線的な海岸線の砂浜や、若狭湾に特徴的なリアス海岸の岩礁など多彩な海岸地形がみられ、津々浦々に漁村集落が展開します。

古くから海に根ざした生活が営まれたと考えられ、江戸時代には大島（養老地区）、日置浜（日置地区）、江尻、溝尻（府中地区）、漁師町（宮津地区）、小田宿野、中津、上司、田井（栗田地区）などで網漁が行われました。なかでも、外海に面した養老地区や栗田地区では、江戸時代から大正時代に越中網（台網）やイワシ定置網（オオシキ）が導入され、大規模な網漁が行われてきました。大正時代には、海産物を加工した竹輪、蒲鉾などの練製品や、イワシのオイルサーディンが製造されました。天橋立観光の土産として喜ばれるとともに、現在も宮津市の名産品となっています。

また、日本海は干満差が少ないことから、大島、江尻、どんぶち、小田宿野などで舟屋がみられました。現在も阿蘇海に位置する溝尻には約40軒の舟屋が残されており、内海を舞台とした漁業や伝統的な漁村の生活を伝えています。近年、収穫量は僅かとなっていますが、かつて溝尻では阿蘇海の「金太郎（樽）鰯」の網漁が盛んに行われました。

さらに、大島、江尻、漁師町、小田宿野、田井などでは「オシマ参り」が続けられ、若狭湾一帯の漁村の祭礼として注目されます。

普甲峠の石畳（上宮津地区）

由良川の河口と廻船（由良地区）

大島の海岸（養老地区）

溝尻の舟屋（府中地区）

上世屋の集落（世屋地区）

上世屋の藤織り（世屋地区）

燈籠流し（宮津地区）

宮津祭の神輿御渡（宮津地区）

５　丹後半島の山を舞台とした生活

宮津市は丹後半島の東部に位置し、隣接する京丹後市や伊根町との境界には、標高 500 から 600m の山並みが連なります。特に、天橋立以北の日ヶ谷地区や世屋地区には地すべり地形が多くみられ、緩斜面を利用して山村集落が展開しています。昭和 38 年の豪雪により離村した例もみられますが、現在も伝統的な山村の生活が伝えられています。

特に、上世屋（世屋地区）は、ブナ林に囲まれた美しい集落です。緩斜面を利用した棚田が展開し、笹葺き屋根の民家と相まって山村の文化的景観を形成しています。市民団体によって藤織り技術が継承されるほか、棚田が維持されており伝統的な里山の生活文化として注目されます。

６　地域社会と祭礼、年中行事

各地区の神社では白山神社祭礼（養老地区）、若田神社祭礼（日置地区）、籠神社葵祭（府中地区）、須津彦神社祭（吉津地区）、宮津祭（宮津地区）、上宮津祭（上宮津地区）、住吉神社祭礼（栗田地区）、由良神社祭礼（由良地区）など伝統的な祭礼が継承され、地域コミュニティの維持においても重要な役割を果たしています。神輿渡御や神楽のほか、太刀振りや浮太鼓などの祭礼芸能が特徴的です。また、都市、農村、漁村を特徴づける、多彩な祭礼や年中行事がみられます。

まず、城下町が築かれた宮津地区では、燈籠流しや子供相撲などが行われます。燈籠流しは 8 月 16 日に行われ、盆行事である「送り火」の一種と考えられます。初盆を迎えた家が精霊船を宮津湾に流す点が特徴です。前日には盆踊りとして宮津市民総おどり大会が実施され、宮津の夏の風物詩となっています。子供相撲は 10 月 10 日に日吉神社の境内社・杉末神社の祭礼として行われ、「赤ちゃんの初土俵入り」と呼ばれています。赤ちゃんが大人に抱えられて神様と相撲をとり、最後は尻もちをついて終了します。子供の成長と健康を祈願する神事と考えられます。

次に、農村集落の今福、山中などでは、ジャヅナ（蛇綱）が行われます。今福では 1 月に各自が藁を持ち寄って蛇の形をつくります。完成したら法螺貝を先頭に大人たちが担いで家々を回り、人の頭を噛みます。噛んでもらうと一年間、無病息災で過ごせるとされています。最後に村境の荒木神社のイチョウの木にジャヅナ（蛇綱）を掛けて終わりです。「勧請縄」や「道切り」の一種で、災難や疫病が村に入らないように祈る行事と考えられます。

次に、漁村集落の大島、江尻、漁師町、小田宿野、田井などで「オシマ参り」が行われます。毎年 6 月 1 日、漁民が豊漁と海上安全を祈願して、若狭湾に浮かぶ冠島の老人島神社に参詣するもので、漁師町では 5 月に「オシマ参り」が行われます。宮津市、舞鶴市や福井県まで広がりをみせる行事で、若狭湾一帯の漁村習俗として注目されます。

最後に、府中地区、宮津地区、栗田地区などで 8 月に地蔵盆が行われます。地蔵菩薩は子供を守護すると考えられており、子供を中心とした行事となっています。地蔵を彩色する化粧地蔵が特徴で、道祖神の祭との関連が指摘されています。

第３節　宮津市の関連文化財群

１　関連文化財群の考え方

関連文化財群とは様々な文化財（図 3）を、関連性のある群（物語）として把握したものです。宮津市の歴史文化の特徴を分かりやすく表現、発信することで、文化財の効果的な活用につながることが期待されます。関連文化財群を構成する文化財は「構成要素」と呼ばれ、一つの構成要素が複数の関連文化財群に含まれることもあります。このことは、一つの文化財が、多面的な価値をもつことを示しています。

文化財を関連性のある群（物語）として把握するという考え方や手法は、重要文化的景観「宮津天橋立の文化的景観」の選定や、日本遺産「300 年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」、「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間　～北前船寄港地・船主集落～」、「1300 年つづく日本の終活の旅　～西国三十三所観音巡礼～」の認定においても、すでに類似した作業を行っており、これらとリンクして関連文化財群の設定や保存・活用を図ることが重要です。

２　関連文化財群の設定

本章第 2 節では、宮津市の歴史文化の特徴を 5 つ視点に沿って明らかにし、これを「都人もあこがれた天橋立と都市・海・山の歴史世界（仮）」というコンセプトで表現しました（図 100・101）。本地域計画では、こうした特徴に基づいて 8 つの関連文化財群を設定し

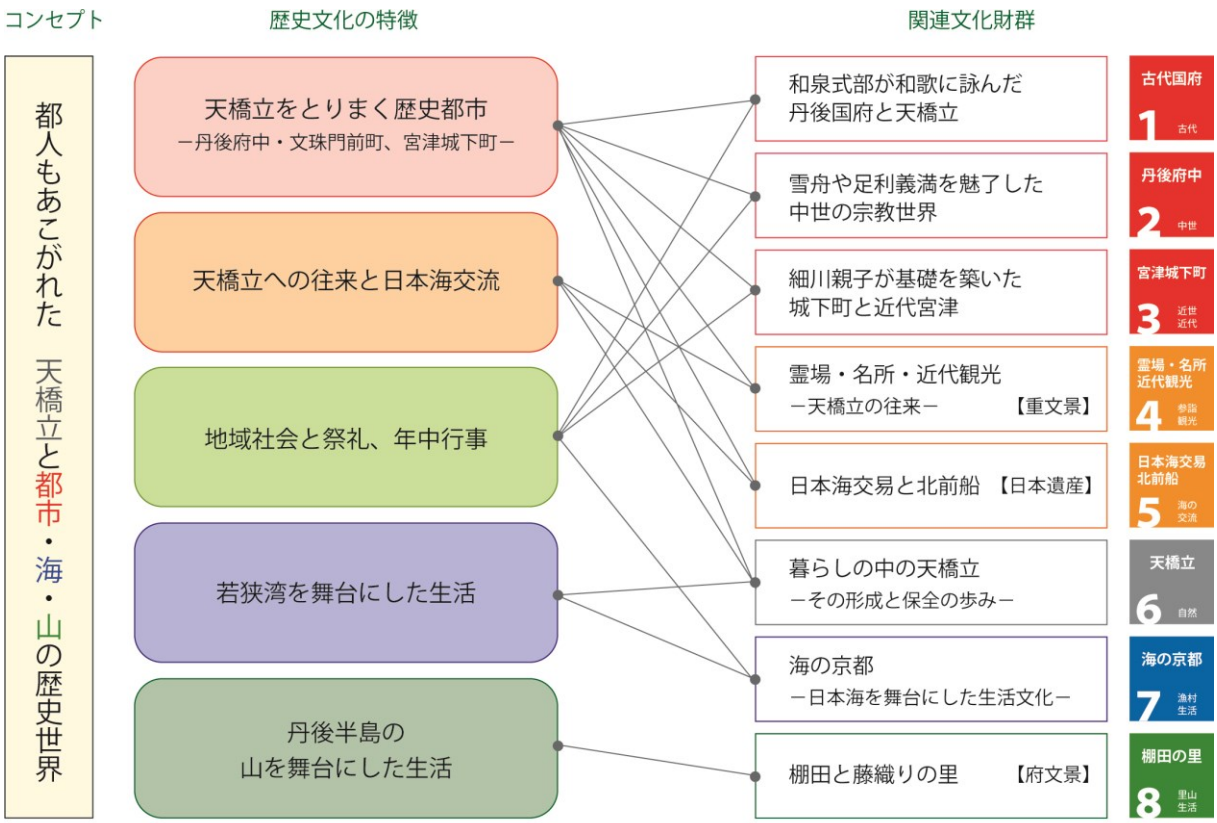

図 101　歴史文化の特徴と関連文化財群

ます（図 101・表 13）。設定にあたっては、時代の流れを示す「通史的テーマ」と、複数の時代や地域にまたがる「文化史的テーマ」に分けて検討します。

（1）通史的テーマ（表 13）

天橋立を取り囲む府中地区や宮津地区には、古代国府、中世守護所、近世城下町という各時代を代表する歴史都市が、間断なく展開しました。これらは丹後の政治・経済の中心地として発展し、宮津市にとどまらず丹後の歴史の舞台となりました。都市の展開に沿って、古代、中世、近世・近代にわたる 3 つの関連文化財群を設定し、宮津の歴史的な展開を示す物語とします。

また、宮津の歴史は、和泉式部、雪舟、足利義満、細川藤孝・忠興など歴史的人物との関わりが深く、日本史との接点も理解しやすいものです。関連文化財群の名称には、こうした歴史的人物の名前を冠し、地域での学習や、まちづくりのコンテンツとして活用できるように工夫しました。

（2）文化史的テーマ（表 13）

通史的テーマが歴史の時間軸を重視した物語であるのに対して、文化史的テーマでは複数の時代や地域にまたがる物語や、生活文化をテーマとして 5 つの関連文化財群を設定します。

「（6）暮らしの中の天橋立」、「（7）海の京都」、「（8）棚田と藤織りの里」は、天橋立

表 13　宮津市の歴史文化の特徴と関連文化財群

歴史文化の特徴	時代				地区	関連文化財群
	古代	中世	近世	近現代		
1 天橋立をとりまく歴史都市	●				天橋立、府中、日置宮津、栗田	（1）和泉式部が和歌に詠んだ丹後国府と天橋立
		●			天橋立、府中、吉津	（2）雪舟や足利義満を魅了した中世の宗教世界
			●	●	宮津、上宮津	（3）細川親子が基礎を築いた城下町と近代宮津
	●	●	●	●	天橋立、府中、吉津	（6）暮らしの中の天橋立
2 天橋立への往来と日本海交流	●	●	●	●	天橋立、府中、吉津宮津、上宮津	（4）霊場・名所・近代観光【重要文化的景観】
			●	●	宮津、栗田、由良	（5）日本海交易と北前船【日本遺産（北前船）】
3 若狭湾を舞台とした生活			●	●	養老、府中宮津、栗田	（7）「海の京都」－日本海を舞台とした生活－
4 丹後半島の山を舞台とした生活				●	日ヶ谷、世屋	（8）棚田と藤織の里【京都府文化的景観】
5 地域社会と祭礼、年中行事				●		（1）、（2）、（3）、（7）

通史的テーマ　　文化史的テーマ

および漁村や里山といった美しい自然環境によって育まれた生活文化をテーマとします。一方、「（４）霊場・名所・近代観光」、「（５）日本海交易と北前船」は、天橋立への往来や日本海交流をテーマとするもので、他の地域に開かれた宮津市の歴史文化の特徴を物語るものです。

このうち（４）は重要文化的景観「宮津天橋立の文化的景観」を、（５）は日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間　～北前船寄港地・船主集落～」を、（８）は京都府選定文化的景観「宮津市上世屋の山村と里山の文化的景観」を基礎として設定し、一部で対象地区を拡大しています。

なお、宮津市の歴史文化の特徴として、各地区で継承される祭礼や年中行事は重要な要素です。ただし、今回はこれらをテーマとした関連文化財群は設定せず（１）、（２）、（３）、（７）の構成要素として、特徴的なものを取り上げています。

３　今後の展望

宮津市には８つの関連文化財群では語り尽くせない物語が、数多く存在します。宮津地区の寺町など時代や地域が限定的なものや、山間部にあることから日常的な管理が課題となる一色氏関連の中世城館、資料が少なく歴史的な評価が進んでいない古代・中世の日置地区など、今回、関連文化財群として取り上げていないテーマの中にも、魅力的な物語は少なくありません。

今後、調査による新たな価値の掘り起しや、行政と市民が一体となった取組みを展開する中で、市民の認知度が向上し、保存・活用の道筋がつけられることで、新しい関連文化財群の設定につながることが期待されます。さらに、こうした物語については「京極氏と寺町（仮）」、「一色氏関連の中世城館群（仮）」、「仏教芸術と御家人・日置氏の里（仮）」などの「サブ・ストーリー」を設定し、保存や活用を図ることも可能です。

古代国府
1 古代

和泉式部が和歌に詠んだ丹後国府と天橋立（仮）

天橋立を望む府中地区には古代国府が置かれ、和泉式部らが和歌に詠む、貴族の憧れの地だった

◆テーマ◆　通史的テーマ（古代）

◆概　要◆

天橋立の北側にひろがる府中地区は、丹後国府の有力な候補地とされ、国分寺や一宮の籠神社、印鑰社が転化した飯役社など、国府に関連する社寺が点在します。また、背後の丘陵には山林寺院の成相寺があり、国分寺の僧侶たちの修行の場と考えられます。丹後国分寺跡、安国寺遺跡、中野遺跡、難波野遺跡などの丹後府中遺跡群からは、奈良時代から平安時代の多量の土器とともに、木簡、墨書土器、硯、銅銭や瓦などが出土し、古代国府に関連する遺跡と考えられます。

府中地区から一望できる天橋立は、平安貴族の邸宅の庭園のモデルとなり、和歌の歌枕とされるなど、都人たちにとって憧れの存在でした。特に、丹後国司となった藤原保昌の妻・和泉式部は丹後に赴いたと考えられ、娘の小式部内侍とともに、天橋立を舞台とした和歌を残しました。

また、国分寺を中心として薬師信仰が広がったと考えられ、金剛心院（日置地区）、如願寺、正印寺（宮津地区）では平安時代の薬師如来像が祀られています。さらに、成願寺（栗田地区）の薬師如来像は、磨呂子親王の伝承である「七仏薬師」の一つとされています。

◆主な構成要素◆

図 102　丹後国分寺跡（史跡）
奈良時代に創建された丹後国の国分寺跡。前面に天橋立を一望できます。現在も地上には、中世に再建された金堂、五重塔の礎石が残されています。

図 103　成相寺旧境内（史跡）
奈良時代に創建された旧境内地が遺跡として残されています。写真の場所には、舞台のような建物があった可能性があり、天橋立の眺望地点として重要です。

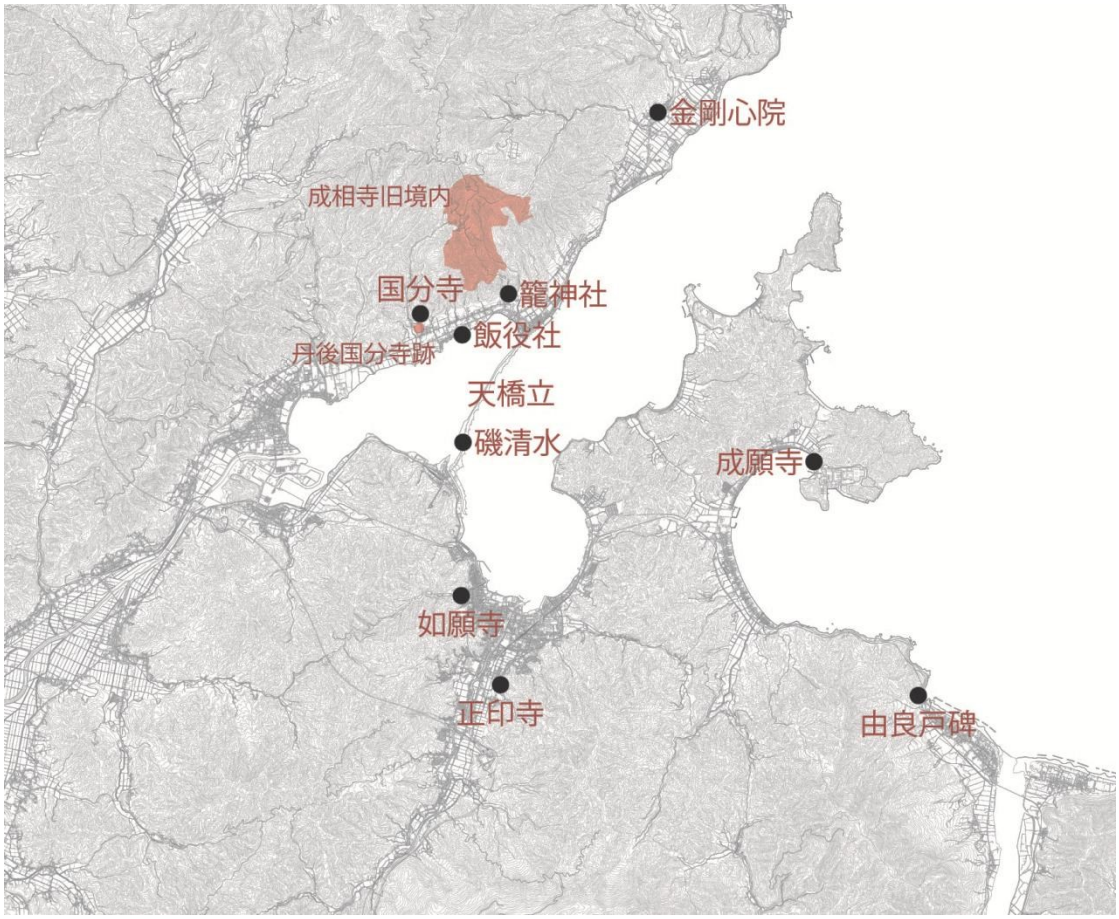

図 104　籠神社
丹後国の一宮。「海部氏系図」（国宝）など多くの文化財を所蔵します。境内の発掘調査では鎌倉時代初頭の鳥居跡を検出。元伊勢信仰でも知られています。

図 105　磯清水
天橋立内に所在します。周囲を海に囲まれていますが真水が湧き出し、和泉式部が和歌に詠んだという伝承があります。江戸時代には宮津藩主が石碑を建立した名所です。

丹後府中
2 中世

雪舟や足利義満を魅了した中世の宗教世界（仮）

中世の丹後府中の姿は、雪舟「天橋立図」に見事に描かれており
足利義満らを魅了した。

◆テーマ◆　通史的テーマ（中世）

◆概　要◆

中世の府中地区には、古代国府につづいて守護所が置かれ、丹後国の政治・経済の中心地として発展しました。明徳 3 年（1392）、一色満範が守護職に任じられてからは、一色氏が約 200 年にわたって丹後国守護を務め、特に、文明 18 年（1486）に一色義直が在国すると、丹後府中の都市整備は本格化したと考えられます。

その姿は雪舟「天橋立図」（国宝）に見事に描かれており、都市景観を描いた日本最古の絵画とも評価されています。下絵であることから、絵画中には雪舟によって地名や社寺の名称などが書き込まれ、中世都市・丹後府中を復元する重要な資料となっています。朱色で塗られた智恩寺、成相寺、籠神社をはじめ、国分寺、宝林寺、安国寺、慈光寺、大谷寺などの多くの社寺が、天橋立と一体となり林立する景観は、神仏が習合する中世霊場の姿を良く表しています。

室町将軍・足利義満は、6 度にわたり九世戸（智恩寺）を訪れ、同行した世阿弥によって能「丹後物狂」が創作されました。こうした文芸作品は、雪舟「天橋立図」とともに、天橋立のイメージを高めていったと考えられます。

◆主な構成要素◆

図 106　雪舟「天橋立図」（京都国立博物館）
天橋立が中央に横たわり、左には文珠地区の智恩寺が、奥には丹後府中の町並みが見事な構図で描かれています。廃寺となった寺院も多く歴史資料としても貴重です。

図 107　智恩寺（特別名勝ほか）
手前に多宝塔（重要文化財）、奥に本堂がみられます。延喜 4 年（904）、醍醐天皇の勅願寺として山号を賜ったと伝えられ、日本三文殊の一つとして信仰を集めています。

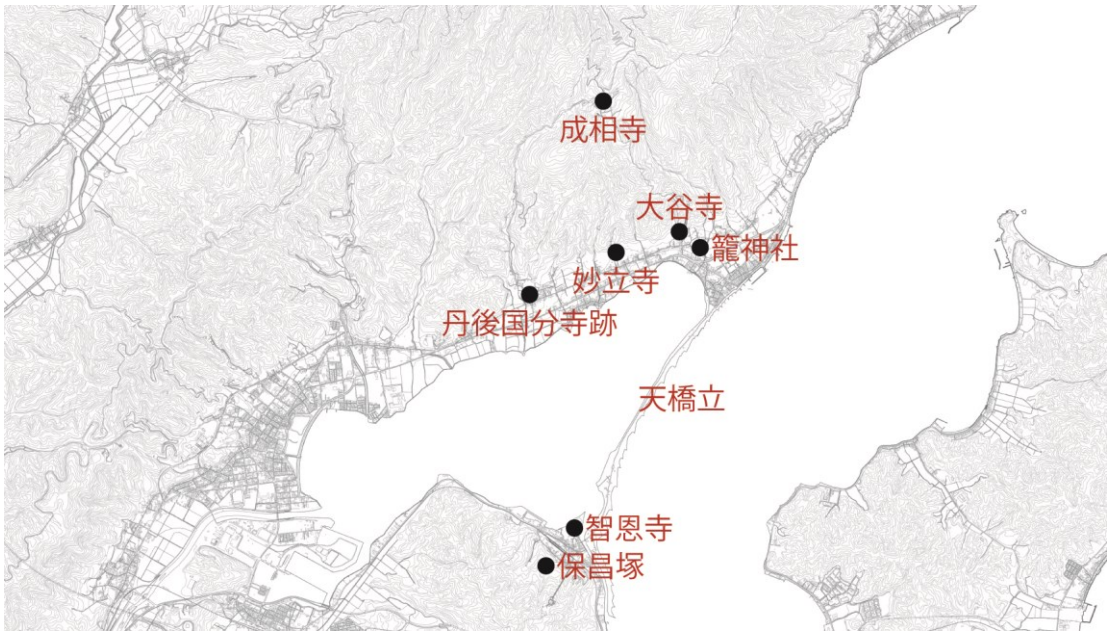

図 108　丹後物狂
足利義満に同行した世阿弥が、天橋立周辺を舞台として製作した能。橋の会により復曲され、平成 21 年 10 月、智恩寺を舞台として観世宗家清和と息子三郎太によって上演されました。

図 109　妙立寺
日蓮宗の寺院。雪舟「天橋立図」には描かれていませんが、所蔵される厨子（重要文化財）の墨書によって、丹後府中における時宗や日蓮宗の動向を知ることができます。

宮津城下町
3 近世 近代

細川親子が基礎を築いた城下町と近代宮津（仮）

城下町が築かれた宮津地区は、
近世・近代をつうじて丹後の中心都市として発展した。

◆テーマ◆　通史的テーマ（近世・近代）

◆概　要◆

天正 8 年（1580）、細川藤孝・忠興は、織田信長の命を受けて丹後に進攻し、宮津城や城下町を築きました。これにより丹後国の政治・経済の中心地は、府中地区から宮津地区へと移りました。

江戸時代に京極家が藩主となると、宮津城や城下町が再興されました。地上に残る宮津城の遺構はわずかですが、発掘調査によって縄張りが復元されています。また、城下町の西南部には現在も寺町が残されるとともに、城下有数の商家であった旧三上家住宅が、江戸時代の繁栄を物語っています。

近代の宮津地区は公共施設や金融機関が集中し、京都府北部の中心都市として発展しました。道路や鉄道の整備により宮津城は失われましたが、城下町が展開した大手川左岸は都市構造に大きな変化がみられず、現在も近世城下町の町割りや両側町の屋敷割りが残されています。近・現代の各時代を代表する商家建築、教会建築、近代建築などが点在し、大正時代から昭和初期の伝統的な町家も多くみられます。

日吉神社では江戸時代の藩祭・宮津祭が継承されるとともに、盆踊り「宮津おどり」や灯籠流し、地蔵盆など伝統的な年中行事や民俗芸能が受け継がれ、地域社会の結びつきを支えています。

◆主な構成要素◆

図 110　宮津城跡
細川藤孝・忠興により、宮津湾に面して築城されました。発掘調査によって堀や石垣が検出され、「城下町絵図」に描かれた宮津城の存在が証明されています。

図 111　旧三上家住宅（重要文化財）
酒造業や廻船業を営んだ商家。現在の建物は天明 3 年（1783）に建てられ、宮津藩の本陣としても利用されました。また、当主は近世・近代の宮津において要職を務めました。

図 112　カトリック宮津教会

明治 29 年（1896）、フランス人宣教師のルイ・ルラーブによって建てられました。床には畳が敷かれ、窓が引違戸であるなど、和洋折衷の造形となっています。

図 113　漁師町の浮太鼓

山王宮日吉神社では、毎年 5 月に藩祭・宮津祭が行われています。浮太鼓は祭礼を構成する民俗芸能で、江戸時代から漁師町によって演じられています。

霊場・名所
近代観光
4 参詣
観光

霊場・名所・近代観光　－天橋立の往来－

天橋立への参詣や観光の歴史が、社寺や旧跡、旅館などに刻まれ、「往来の文化的景観」として日本の旅文化の展開を物語る。

◆テーマ◆　文化史的テーマ（参詣・観光）

◆概　要◆

①名所と社寺参詣　平安時代の天橋立は和歌の歌枕となり、都人が憧れる名所として知られていました。また、平安時代には成相寺が西国三十三所霊場の一つとなり、観音信仰の霊場として多くの参詣者を集めました。

②庶民の旅と日本三景　江戸時代に庶民の旅が流行すると、天橋立は日本三景の一つとされ、日本を代表する景勝地となりました。城下町が築かれた宮津地区は、天橋立に往来する交通拠点となり、天橋立への渡船場が置かれた文珠地区では、智恩寺の門前に四軒茶屋が出現しました。

③近代観光地への転換　明治時代、智恩寺の境内であった天橋立は官有地となり、公園整備が行われました。休憩施設や運動場、海水浴場などが設置され、大天橋や小天橋（廻旋橋）と呼ばれる橋梁が架けられました。また、府中地区では傘松の展望所やスキー場が整備され、文珠地区との間には汽船が就航しました。これに伴って文珠地区や府中地区には木造三階建ての旅館が建ち並び、伝統的な名所から近代観光地へと発展しました。

一方、宮津地区でも、明治時代に京都・宮津間車道や宮津－敦賀間を結ぶ航路が開設され、大正 13 年には鉄道が開通しました。清輝楼や茶六本館など木造三階建ての旅館が建設され、天橋立への往来を支えました。

◆主な構成要素◆

図 114　成相寺
平安時代に西国三十三所霊場の一つとなり、信仰を集めてきました。江戸時代の参詣道・本坂道からは天橋立を一望でき、町石などが残されています。

図 115　四軒茶屋
智恩寺の門前に営まれ、現在も江戸時代から続く「智恵の餅」が名物となっています。明治時代には旅館経営にも乗り出し、天橋立の近代観光の発展にも重要な役割を果たしました。

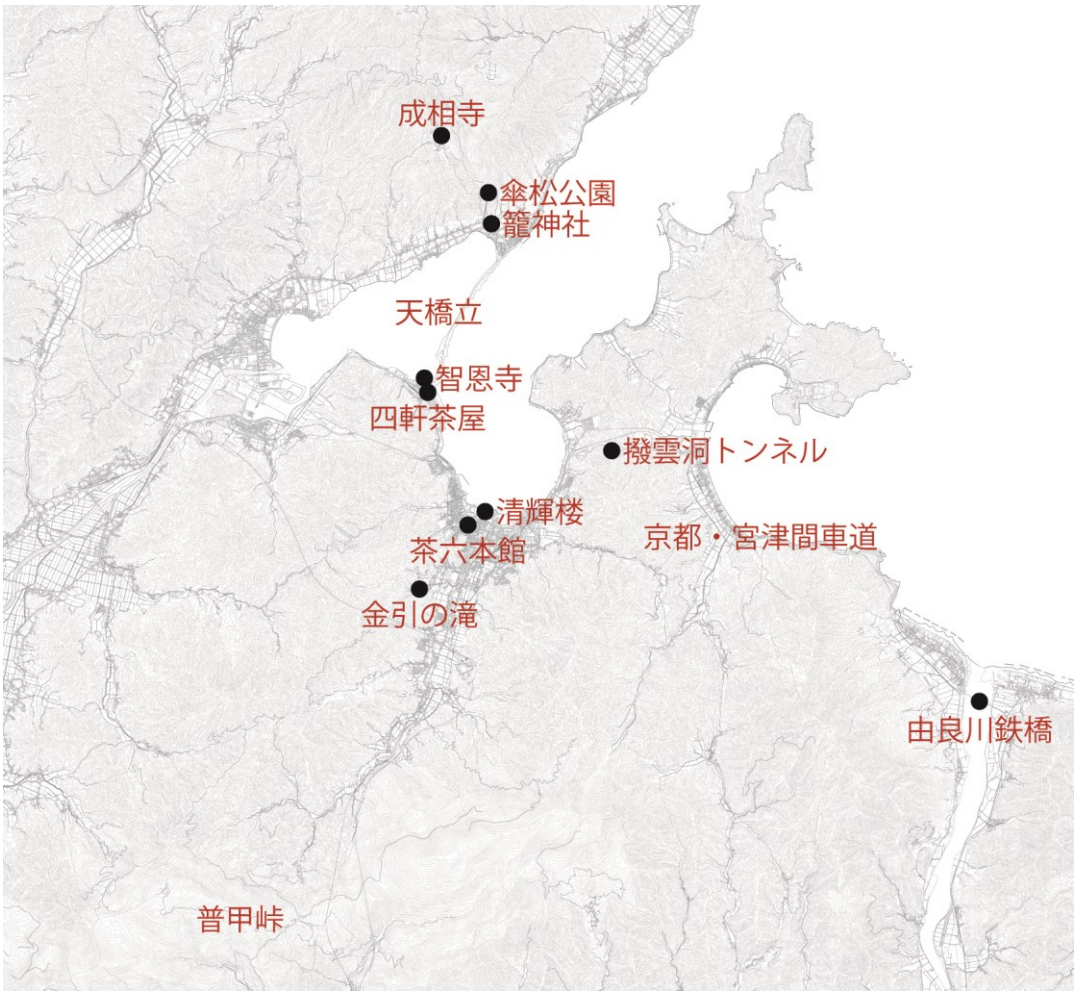

図 116　傘松公園とケーブルカー
明治 33 年頃、府中地区の傘松に天橋立の展望所が設置され、「股のぞき」などで有名となりました。昭和 2 年にはケーブルカーが開通し、近代天橋立観光の拠点となりました。

図 117　清輝楼（国登録文化財）
明治時代に建てられた木造三階建ての旅館。河東碧梧桐、菊地寛、吉川英治など多くの文人墨客が逗留し、近代の天橋立への往来を象徴する存在です。

日本海交易
北前船
5 海の交流

日本海交易と北前船

宮津地区や、由良川水運の拠点・由良地区を舞台とする
ダイナミックな日本海交易の遺産。

◆テーマ◆　文化史的テーマ（海の交流）

◆概　要◆

城下町が築かれた宮津地区は、港町としても発展し船問屋の史料から日本各地の廻船が寄港したことがわかります。また、和貴宮神社に奉納された玉垣には、全国各地の商人の名前が刻まれており、宮津での足跡をうかがうことができます。さらに、宮津地区で活躍した三上家、今林家、田中家（現・尾藤家）などの商人も、幕末から明治時代に北前船の経営に乗り出し、全国各地の客船帳に記録が残されています。

一方、由良川の河口に位置する由良地区は、説教節「さんせう大夫」の舞台として知られ、中世から日本海交易の一翼を担った可能性があります。江戸時代には由良川水運の拠点として発展し、北前船の船持ちや船頭を輩出しました。

特に、「加藤家文書」には、三上家の船頭を務めた加藤長助の「航海日記」がみられ、大坂と北海道を往復した北前船の航路を具体的に知ることができます。また、由良地区の金毘羅神社、照国稲荷神社、玉司稲荷神社には船持ちや船頭が奉納した船絵馬が、栗田地区の住吉神社には奉納和船がみられ、危険と隣り合わせだった航海が偲ばれます。

◆主な構成要素◆

図 118　和貴宮神社の玉垣

天保 15 年（1844）に建立され、51 名の寄進者が記されています。越中、能登、越前、近江、京都、大坂など全国の商人がみられ、廻船で宮津に寄港した人物も含まれると考えます。

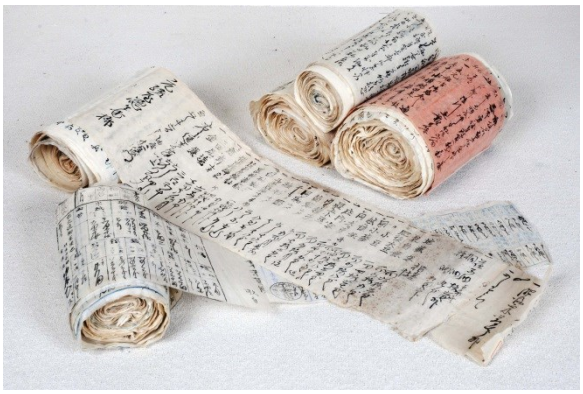

図 119　三上家文書

北前船の船主であった三上家の文書。商品の相場を記したものがみられ、米、塩（三田尻）、大豆、小豆、小麦、繰綿、砂糖などが取引されています。

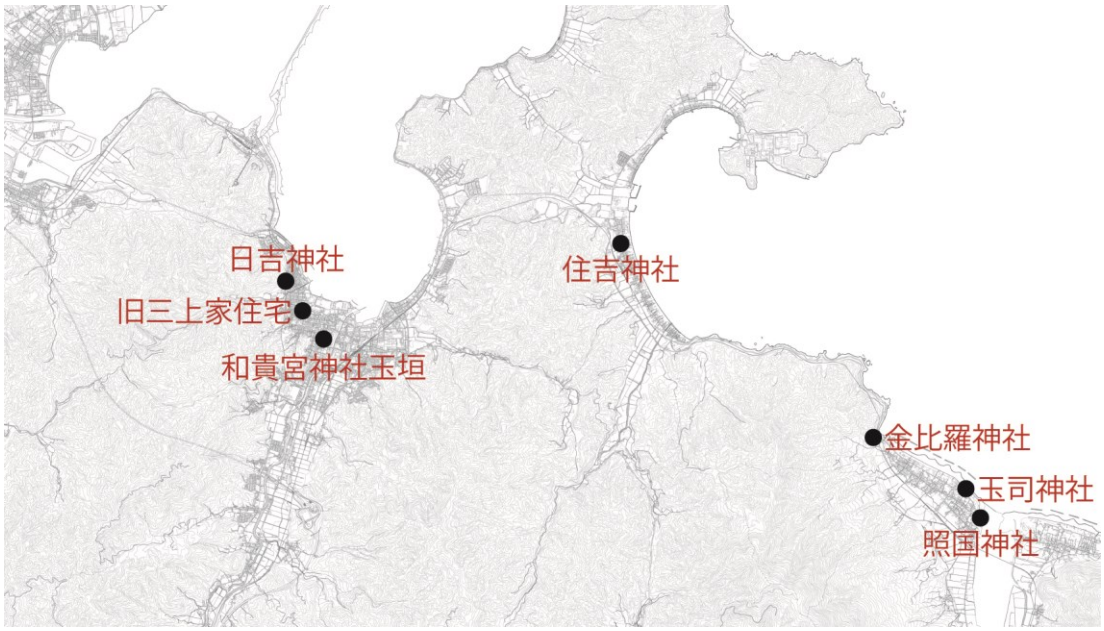

図 120　金比羅神社の船絵馬

由良地区の船持ちや船頭が、航海安全を願い神社に奉納した船絵馬。写真は、明治 17 年に宝求丸（船頭：加藤長介）が難破した様子を描いています。

図 121　宮津おどり

「宮津節」、「宮津盆おどり松坂」、「あいやえおどり」で構成される民俗芸能。「あいやえおどり」は、天草で発生した「ハイヤ節」が全国各地の港町に伝播したとされています。

天橋立
6 自然

暮らしの中の天橋立　－その形成と保全の歩み－

日本を代表する景勝地・天橋立の景観は人々の努力によって守られている。

◆テーマ◆　文化史的テーマ（自然）

◆概　要◆

天橋立は宮津湾と阿蘇海を南北に隔てる、全長 3.8 ㎞の砂州です。府中地区では天橋立が形成された弥生時代中頃から遺跡が増加し、難波野遺跡では天橋立の方向を意識して土器を「コ」字形に並べた古墳時代の祭祀遺構がみつかりました。まさに当地の生活は、天橋立とともにあったのです。

かつては天橋立神社の付近が天橋立の先端部で、智恩寺と天橋立の間には幅約 100m の水道（切戸）が存在しました。潟湖であった阿蘇海は、良好な港として丹後府中の繁栄を支えるとともに、宮津湾から回遊する「金太郎（金樽）鰯」は名物とされました。江戸時代後期に天橋立の砂州が伸長すると、回遊魚が減少し阿蘇海を漁場とする漁民たちは「橋立切断」を願い出ました。この願いは智恩寺の住職によって退けられたようで、江戸時代における天橋立の保存運動として注目されています。現在も阿蘇海に面した溝尻には約 40 軒の舟屋が残り、伝統的な漁村集落の生活文化を継承しています。

昭和 40 年代には、河川の護岸工事により海に流れ出る砂礫が減少し、天橋立の浸食が進みました。サンドバイパス工法により砂州が維持されています。また、放置された落ち葉により土壌が肥沃化し、クロマツの弱体化や広葉樹の成長が顕著となったことから、ボランティアによる松葉の回収や、計画的な広葉樹や松の伐採が続けられています。

◆主な構成要素◆

図 122　天橋立（特別名勝）
河川から海に流れ出た砂礫が南下して堆積。美しい姿から、『丹後国風土記逸文』は、その形成を神の仕業としています。江戸時代には智恩寺の境内地でした。

図 123　天橋立神社
天橋立の濃松に所在します。かつては天橋立の先端に位置し、「慕帰絵詞」などには現在地に祠が描かれています。現在も鳥居が海に面して建っています。

図 124　小天橋（回旋橋）
天橋立の砂州が伸長する中、大正 12 年に架橋されました。これにより文珠地区と天橋立を結ぶ渡し舟は廃止となりましたが、橋が回転する姿は、天橋立観光の新しい名物となりました。

図 125　溝尻の舟屋群
内海の阿蘇海に面した漁村集落で、約 40 軒の舟屋が残されています。阿蘇海を漁場とした漁業が営まれ、「金太郎（金樽）鰯」の網漁が盛んでした。

海の京都
7 漁村生活

海の京都　－日本海を舞台とした生活文化－

津々浦々の漁村に根付く、伝統的な生活と信仰。

◆テーマ◆　文化史的テーマ（漁村生活）

◆概　要◆

日本海に面した宮津市では、古くから海を舞台とした生活が展開され、江戸時代には大島（養老地区）、日置浜（日置地区）、江尻、溝尻（府中地区）、漁師町（宮津地区）、小田宿野、中津、上司、田井（栗田地区）などで網漁などが盛んに行われました。このうち大島、江尻、漁師町、小田宿野、田井などでは、冠島（舞鶴市）への「オシマ参り」が行われ、若狭湾一帯の漁村の祭礼として注目されています。

宮津地区の漁師町は、関ヶ原の戦いに際して西軍が宮津城に迫る中、細川藤孝（幽斎）を田辺城に送ったという伝承があり、現在も宮津湾の漁業権が認められています。江戸時代より網漁が行われ、近年では丹後トリガイの養殖などにも取り組んでいます。明治、大正時代からは蒲鉾や竹輪などの練製品や、味醂干し（桜干し）といった水産加工品が製造され、天橋立観光の土産品として喜ばれました。現在も名産品となっています。

栗田半島では「オオシキ」と呼ばれる定置網漁が行われ、イワシを捕獲しました。明治時代には京都府水産講習所によって「鰮油漬」（オイルサーディン）が開発され、現在も名産品となっています。

◆主な構成要素◆

図 126　丹後の漁撈文化

養老や栗田地区では、沿岸に設置される定置網漁が盛んです。イワシ、サワラ、ブリ、マアジなどを捕獲します。網に迷い込んだ魚は奥の箱網に誘導され、船で網を引き上げます。

図 127　練製品

明治時代初期に、すり鉢が石臼へと変化し、竹輪や蒲鉾といった練製品が製造されました。特に、宮津では婚礼などの祝儀に際して細工蒲鉾が作られました。

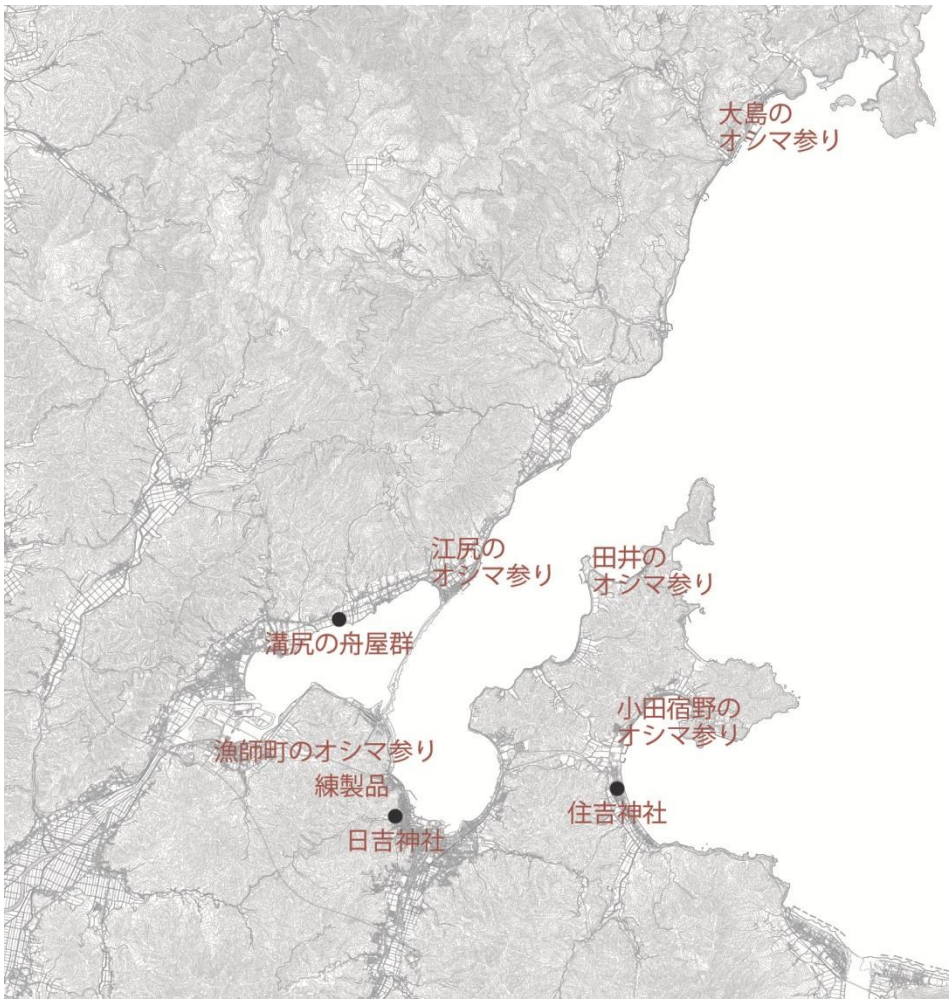

図 128　漁師町のオシマ参り

4 月下旬に船を仕立てて、冠島にある老人嶋神社、船玉神社、瀬ノ宮神社に参り、海上安全や大漁を祈ります。帰路には伊根の青島や、天橋立神社に立ち寄ります。

図 129　住吉神社の栗田祭

栗田郷の総社とされる住吉神社で 10 月に行われます。神社と浜を往復する「神輿洗い」では、神輿が相撲場で回転する際に先棒を取り合う場面が見どころとなっています。

棚田の里

8 里山生活

棚田と藤織りの里

美しい里山に展開する、エコロジカルな生活文化。

◆テーマ◆　文化史的テーマ（里山生活）

◆概　要◆

丹後半島の山間部に位置する日ヶ谷地区、世屋地区では、地すべり地形による肥沃な土壌や、豊富な水資源に支えられ、山村集落を形成してきました。地すべり地形を利用した棚田のほか、山裾では畑作が行われ、日ヶ谷地区の「日ヶ谷ゴボウ」は皇室に献上されました。また、近世以来、山林資源を生かした炭焼き、藤織りなどの生業が営まれ、山を舞台とした生活文化として注目されます。

特に、上世屋はブナ林に囲まれた美しい山村集落です。緩斜面には棚田が展開し、笹葺き屋根の民家が点在します。耕作地と森林の境には採草地、陰伐地、茅場が広がり、密生するチマキザサは屋根材に利用されてきました。さらに周辺のブナ林は、建築部材や炭焼きなどに利用され、環境を有効活用した「里山」の生活が営まれています。

また、上世屋では藤織りが冬場の副業として貴重な現金収入源となりました。現在も藤織りの伝統技術が継承されています。

◆主な構成要素◆

図 130　薮田の集落（日ヶ谷地区）
丹後半島の地すべり地形を利用して、棚田が作られています。笹葺き屋根の伝統的な民家も残ります。

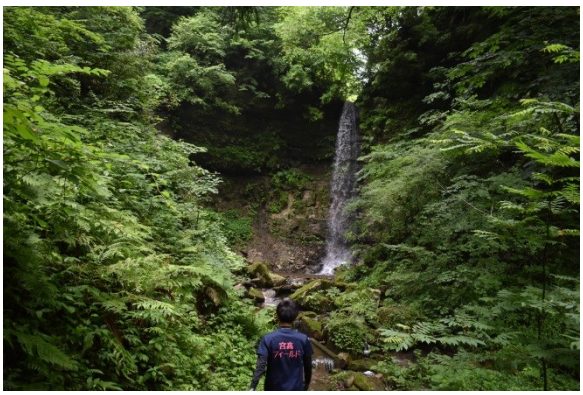

図 131　銚子の滝（世屋地区）
上世屋集落の慈眼寺は、成相寺（府中地区）の奥院と伝えられ、寺の北側には、本尊を祀ったとされる観音堂や銚子の滝があります。

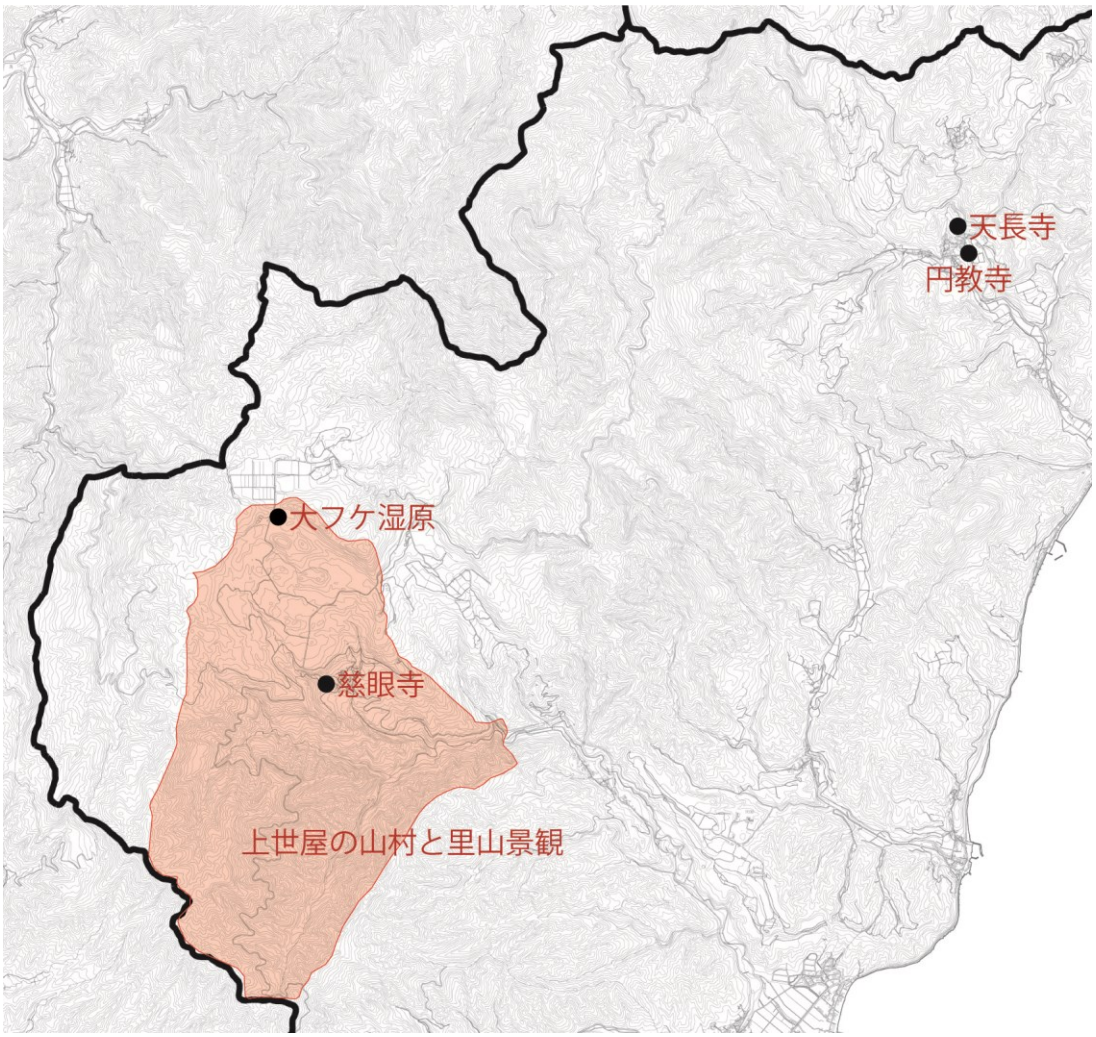

図 132　藤織り
藤の繊維を原料にした織物。写真は「ヤマギ」と呼ばれるもので、その技術は丹後藤織り保存会によって継承されています。

図 133　日ヶ谷ゴボウ
日ヶ谷地区で栽培されるゴボウは、肉質がやわらかく、香りが良いという特徴があり、大正から昭和初期には皇室に献上されました。

表14　関連文化財群と構成要素

	（1）古代国府	（2）丹後府中	（3）宮津城下町	（4）参詣・観光	（5）日本海交易	（6）天橋立	（7）海の京都	（8）棚田の里
全体		雪舟「天橋立図」（国宝） 慕帰絵詞（重文）		宮津天橋立の文化的景観（重文景） 丹後天橋立之図（未） 与謝之大絵図（未）	日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」		丹後の漁撈習俗（国選） 丹後半島の漁撈用具（国登）	
日ヶ谷								天長寺（未） 円教寺（未） 落山神楽（市指） 日ヶ谷ゴボウ（未）
養老							大島のオシマ参り（未）	
世屋								大フケ湿原（市指） 上世屋の山村と里山景観（府文景） 丹後の紡織用具及び製品（国指） 丹後の藤布紡織習俗（国選） 丹後の藤織り（府指） 慈眼寺（未）
日置	金剛心院（未） 如来形立像（重文）							
府中	成相寺旧境内（国史） 丹後国分寺跡（国史） 国分寺（重文景） 安国寺遺跡（未） 中野遺跡（未） 難波野遺跡（未） 籠神社（重文景） 海部氏系図（国宝） 飯役社（重文景）	成相寺旧境内（国史） 成相寺参詣曼荼羅（府指） 丹後国分寺跡（国史） 丹後国分寺再興縁起（重文） 安国寺遺跡（未） 中野遺跡（未） 慈光寺跡（未） 一宮遺跡（未） 阿弥陀ヶ峰城跡（未） 今熊野城跡（未） 妙立寺（重文景）		府中古道（重文景） 天平の道（未） 成相寺（重文景） 成相寺参詣曼荼羅（府指） 籠神社（重文景） 真名井神社（重文景） 成相寺参詣道（重文景） 傘松公園（特名） 傘松ケーブル（重文景） 一宮桟橋（重文景）		国分遺跡（未） 中野遺跡（未） 一の宮遺跡（未） 難波野遺跡（未） 溝尻舟屋群（重文景）	溝尻の舟屋群（重文景） 江尻のオシマ参り（未）	

	（1）古代国府	（2）丹後府中	（3）宮津城下町	（4）参詣・観光	（5）日本海交易	（6）天橋立	（7）海の京都	（8）棚田の里
府中 （つづき）		髣髴厨子（重文） 大谷寺（重文景） 阿弥陀如来像（府指） 観音菩薩像（府指） 勢至菩薩像（府指） 不動明王坐像（府指） 智海の板碑（市指） 籠神社（重文景） 木造扁額（重文） 一宮深秘（府指） 天神社（重文景） 北野宮再興勧進状（府指） 江之姫神社（重文景）						
天橋立	天橋立（特名） 磯清水（重文景）	天橋立（特名）		天橋立（特名） 天橋立神社（重文景） 磯清水（重文景） 大天橋（重文景） 小天橋（重文景） 玄妙庵掬翠荘（重文景）		天橋立（特名） 阿蘇海（未） 宮津湾（未） 天橋立神社（重文景） 大天橋（重文景） 小天橋（重文景）		
吉津		智恩寺（特名） 文殊菩薩像（重文） 多宝塔（重文） 九世戸縁起（府指） 宝篋印塔（市指） 保昌塚（市指） 三角五輪塔（市指） 石像地蔵菩薩像（市指）		智恩寺（特名） 智恩寺文殊堂（府指） 文殊菩薩像（重文） 涙ヶ磯（重文景） 智恵の輪燈籠（重文景） 灯明台（重文景） 四軒茶屋（重文景） 天橋立桟橋（重文景） 対橋楼（重文景） 松露亭（重文景） 松影旅館（重文景）		どんぶち（重文景） 天橋立真景図（未）		

	（1）古代国府	（2）丹後府中	（3）宮津城下町	（4）参詣・観光	（5）日本海交易	（6）天橋立	（7）海の京都	（8）棚田の里
吉津 （つづき）				千歳旅館（重文景） 玄妙庵（重文景）				
宮津	如願寺（未） 薬師如来像（府暫） 正印寺（未） 薬師如来坐像（府暫）		八幡山城跡（未） 宮津城跡（未） 正保宮津城下絵図（未） 宮津鶴賀城郭之図（未） 如願寺（未） 佛性寺（未） 大頂寺（未） 妙照寺（未） 栄照院（未） 本妙寺（未） 経王寺（未） 国清寺（未） 悟真寺（未） 無縁寺（未） 智源寺（未） 日吉神社（未） 和貴宮神社（未） 一色稲荷（未） 本荘神社（未） 太鼓門（未） 旧三上家住宅（重文） 今林住宅（国登） 尾藤家住宅（未） 三上泰明家住宅（未） 矢野家住宅（未） 黒田家住宅（未） カトリック宮津教会（府指） 聖アンデレ教会（未）	撥雲洞トンネル（国登） 売間九兵衛翁の碑（未） 京都・宮津間車道（未） 清輝楼（国登） 茶六本館（国登） キセンバ港館（未） 大膳橋（未） 絵はがき（未） 観光案内パンフレット（未） 金引の滝（未）	日吉神社（未） 和貴宮神社玉垣（未） 旧三上家住宅（重文） 三上家文書（府指） 三上家祈祷札（未） 今林家住宅（国登） 尾藤家住宅（未） 浜田家文書（未） 新浜の町並み（未） 宮津おどり（市指）		日吉神社（未） 漁師町の浮太鼓（市指） 漁師町のオシマ参り（未） 練製品（未）	

	（1）古代国府	（2）丹後府中	（3）宮津城下町	（4）参詣・観光	（5）日本海交易	（6）天橋立	（7）海の京都	（8）棚田の里
宮津 （つづき）			本荘家墓所と石橋（未） 天橋義塾碑（未） 宮津祭（未） 地蔵盆（未） 宮津おどり（市指）					
上宮津			盛林寺（未）	普甲峠（未） 石畳（未） 千歳嶺碑（未）				
栗田	成願寺（未） 薬師如来坐像（未）				住吉神社（未） 住吉神社奉納和船（未）		住吉神社（未） 栗田住吉神社祭（未） 小田宿野のオシマ参り（未） 田井のオシマ参り（未）	
由良	由良の戸碑（未）			由良川鉄橋	地蔵菩薩像（府指） 加藤家文書（府指） 由良米屋文書（未） 金比羅神社（未） 金比羅神社絵馬（府登） 玉司神社（未） 玉司神社絵馬（府登） 照国神社（未） 照国神社絵馬（府登） 寶求丸船名板（未） 袋遊丸船名板（未）			